

ART ESSAY

アート★エッセイ

二足の草鞋?^{わらじ}



菱田 俊子
(版画家)

先日、個展会場でこんな質問をされました。「高校の美術の教師もやっているそうですが、制作に専念したいと思うことはないのですか？」

質問された方の目が、あまりに真剣だったので、これはいい加減な答え方はできないと思い、一息おいてから、このように答えました。

「確かに、以前はそう思ったこともありましたが、今はそう思うことはありません。自分の成長のために、どちらも必要なことだと思っています」

教師を辞めれば、その分制作時間は増えます。そうすれば、今より何点か多くの作品を作ることはできるでしょう。制作に、より多くの時間をかけられるとしたら、作家にとって、それは何よりも幸せなことです。

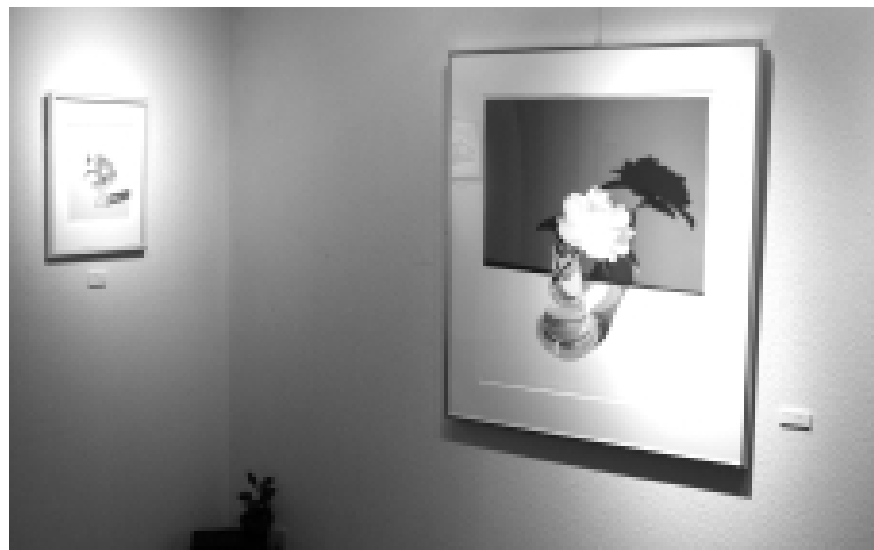
しかし一方で、制作は、単に作品数を増やすだけのものではないとも思っています。作品とは、作者を鏡のように映し出すものです。今よりいい作品を作るためには、自分自身の成長が必要なはずで

私にとって、日々の生徒とのやり取りは、自分を磨くための絶好の機会となっています。時には、生徒に腹を立てたり、失望したりしながらも、その中で気付かされるものは、実にたくさんあります。

高校生は、大人に近い状態にまで成長していますが、それでもやはり子どもらしい部分も多く残っています。その純粋さに感動させられることもあれば、あまりに率直な発言に傷つくこともあります。それは子どもたちの社会性の不足とも言えますが、しかし一方で、正に私が自分自身を見つめ直す機会ともなります。こうした毎日の経験が、私自身のものの考え方を深めることにつながり、私の作品も変化していくことになるのだと思っています。

美術教師というのは、好きな美術を教え、生徒とやり取りをする中で、人間性が鍛えられ、その結果を作品という形に表すことができる、とても幸せな職業だと思えます。

(ひしだ としこ)



個展会場の風景
2005年12月

特集

造形教育にしかできないこと

第2回

日本の教育をデザインする

「ひとづくり」と文化立国・デザイン立国

少し気負いこんだ言い方が許されるのであれば、教育は確実にわが国の未来を決定していきます。教育をデザインすることは国家のグランドデザインをすることです。

地球と人類、わが国と諸外国との関係、文化の継続と発展、生活のありよう…など、いくつかの問題に特別な結論を、若い世代に言い渡していくことになります。

わが国が“世界の工場”であることには限界が見えています。すでに経済産業省の「ものづくり国家戦略ビジョン」では、結局のところ質の高い、美しい製品をつくり出すことが国家的な命題であり、その前提が「ひとづくり」であると、教育の議論を待たずに宣言しています。

ここでは、より具体的なデザイン活動に照準が合わされています。このような論理展開は「アーツ&クラフツ」運動をリードすることとなったW.モリス、J.ラスキンの主張と同じです。デザイン立国の可能性はすべての民衆の芸術教育にあると。バウハウスを生み出すことになったドイツ工作連盟のムテジウスも同じように考えました。

国民全体の美的教養の涵養がすばらしいデザインを生み、総合的な国力につながると思ったのです。

ともに文化立国、デザイン立国は人づくりであると看破しています。

美を追い求め、生の充実感にあふれた生活は、すばらしい造形物を生み出すことになり、このような価値観の共有は、充実した造形教育の延長に見えてきます。

マクロなデザインから具体的なデザインまで大きな流れが見えてきます。造形行為を十分に体験した児童・生徒のみが社会の各分野にわたる生活者として、新しいものづくりの理念を展開していきます。造形教育の充実は、わが国の将来設計に大きく関わっています。

教育現場に真・善・美の復活を

彫刻家・東京藝術大学大学院教授(文化財保存学) 藪内佐斗司

1. 造形教育の答えは無限にある

人が求めるべき大切な価値観に「真・善・美」があります。「真なるもの」を求める科学的探求心、「善なるもの」を求める倫理観、そして「美なるもの」を求める芸術観、この三つがバランスよく育まれることによって、近代教育は完成した人格の形成を期待したのだと思います。しかし、現在では、効率や物質的豊かさと刹那的快楽を追求する社会的風潮の中で、「真・善・美」を求める姿勢は、教育現場でとっくに忘れられてしまったようです。

さて、職業的な彫刻家である私の経験から言っても、初等教育で、上手に絵を描かせたり、彫刻をつくらせようとしたりする「作家的教育」はあまり意味がないと思います。プロ野球選手は、子ども時分から野球が上手だったでしょうし、将棋のプロは、教えられることなく将棋を覚えると聞いたことがあります。それと同じように、プロの芸術家になるような子は、カリキュラムによってつくられるのではなく、自由な環境から勝手に育っていくものです。

したがって、おおかたの子どもたちに必要なことは、自然界の美しいものに触れ、たくさんの優れた造形作品に親しみ、心豊かな生活を実現する「作法」を身につけさせることだと思います。言葉を換えて言えば、自然の営為に素直に感動し、過去から現在に至るまで人類がつくり上げてきた芸術作品に対して、畏敬の念と愛情を抱く「こころ」を育むことです。したがって、上質な音楽や文学、映像に親しむように、造形も情操教育の一環としてとらえるべきで、自分を高め、心地よくしてくれるものを見つけられる「感性」を育てることが大切です。

もちろん、ごく少数ですが、絵を描き、工作をすることが何よりも好きな子が必ずいます。彼らにはそれぞれの長所を見つけて、自由に伸ばしてやるということも、教育現場では重要なことですが、くれぐれも押しつけと安易な競争原理で評価をしないことです。

数学や理科のような科学の分野では、たった一つの答えを要求します。しかし、芸術は個人の感動にもとづいて成立するものですから、回答は子どもの数だけあるのが当たり前なのです。

2. 自然への感動を子どもたちに

繰り返しになりますが、人が造形活動をするためには、感動という動機づけが一番必要であり、感動は、まったく個人的な情動現象ですので、その結果は無限です。今の日本のように数値的評価を求める教育現場で、造形教育を行うことは至難のことだと思いますが、科学教育とは違った観点からの指導と心配りが不可欠です。

花を観察して、その可憐さや優雅さに酔い、植物が持つ曲線の不思議さや薄い花びらを透かして見える光線の美しさに感動できることが、造形教育でもっとも大切なことです。いつまでも飽きずに見とれている子もいれば、画用紙にそれを写し取ろうとする子もいるでしょう。退屈してほかの刺激を探すがいても、ちっとも不思議ではないのです。

一粒の種子を土に埋め、水をやっていると、殻をかぶった芽が首をもたげてきます。その仕組みを冷静に観察し探求することが科学ですが、その生命力と美しさに感動することが造形教育なのです。すべての芸術作品は、表現者がこうした感動をもとに創作してきたわけです。

自然と向き合うということは、生命が生まれる喜びとともに、死を実感することでもあります。

小さな虫でも、生きている時と死んだ後では、あきらかにその様子が違います。みずみずしい命も、死ねば必ず醜い姿となってから自然に帰っていくことを知ることも大切です。空を見上げれば雲が千変万化し、太陽の動きにつれて雄大な天空が織りなすさまざまな色彩に見とれることも大切な造形教育です。

現場の先生方は勇気を持って、子どもたちの小さな感動の大きな受け皿に徹してほしいと思います。

3. 本物を子どもたちに

私は、今の子どもたちが特段不器用だとは思いません。彼らと携帯メールの速さやコンピュータゲームを競えば、私に勝ち目はありません。彼らは、弁当箱の蓋の裏についたご飯粒を箸でつまんで食べる必要も、「肥後の守」で竹とんぼや鉛筆を削る必要がないから下手なだけなのです。それは今の大人が、木をこすり合わせて火を起こせなかったり、切り火でつけ木に火を移すことができなかつたりするのと、まったく同じ事情であり、子どもは大人の鏡であるわけです。

私が幼いころには、図画工作のほかに、現在もあると思いますが、技術・家庭という授業がありました。私は、やすりで鉄を削ったり、のみで木にほぞ穴をあけて椅子をつくったり、また簡単な料理をつくることや裁縫も大好きでした。それぞれの専門の先生は、技能の面で子どもたちとは雲泥の差があり、先生の見事な手さばきを尊敬の眼で見つめた記憶があります。ものをつくる喜びとともに、見事な技術を目の当たりに見せてくれる大人の存在も、造形教育の現場では不可欠です。

現代の子どもたちは、人工的素材でつくられたもので溢れ、映像やゲームなど「仮想世界」の中だけで遊んでいるのが実情です。もちろん、昔も宗教や迷信、また文学や芸術などの仮想現実に関わってはいましたが、現在のように、人工物とデジタル情報に完全に取込まれた中で育っていくという経験は、人類の歴史の中で初めての経験です。

したがって、これからの造形教育も図画工作という範疇からますますはみ出していかざるをえな

いことでしょう。そして、一人一人の「こころ」の中に、本物に対する「感動」を呼び起こすことを中心にした「総合的情操教育」として、学校外の専門家と連携しながら、社会全体で再構築すべきだと思います。

少し前まで、学術分野では「ポストモダン-近代の超克」が話題になっていました。しかし、これからは、あらゆる分野で「現代を超克する」ことが求められてくるでしょう。もちろん、学校教育も科目別の教育方法から、学際的、横断的な教育理念が必要となってくると思います。そして、その中心に据えられるべきは、きわめて古典的な「真・善・美」を求める姿勢であってほしいと願っています。

(やぶうち さとし)



藪内佐斗司「振鈴童子」1998年作
檜・漆・顔料 高さ35cm

地域が育てるアート アートが活きる地域

～取手アートプロジェクトを一例として～

内閣官房地域再生推進室企画官 岡本 信一

1. 取手アートプロジェクト

茨城県取手市では、平成2年に市内に開学した東京芸術大学との間で、平成4年6月に「東京芸術大学と芸術・文化に関する覚書」を締結し、これに基づく「取手市と東京芸術大学との芸術・文化懇談会」を設置して、地域社会の芸術・文化の向上を図り、双方の連携と協力を一層深めています。

その活動の成果の一つが、同市行政機関(市役所、教育委員会、取手市文化事業団)、市民(アート取手・郷土作家の会)、東京芸術大学などが実行委員会を組織して、平成11年より毎年企画・運営している文化事業である取手アートプロジェクト(TAP)です。

芸術は、作り手(作家)のみによってなされるのではなく、創造活動を育み支えるための社会的な仕組みづくりが必要不可欠です。TAPは、若いアーティストたちの創作発表活動を支援し、芸術に身近に触れる機会を広く市民に提供することで、市民の支持や協力を広げることによって、地域文化の活性化を図るもので、作家や学生のみならず、受け手(顧客)やつなぎ手(アートコーディネーターやマネージャー)を育てることもプロジェクトの大きな目標としています。

TAPの主なプログラムとしては、全国公募による野外アート展「取手リ・サイクリングアートプロジェクト」と市在住作家、大学院生などのアトリエを一般公開する「オープンスタジオ」を毎年交代で実施しています。また、関連事業として、取手市内の小学校1年生全員の絵を展示する展覧会「児童画展」や公開シンポジウム、各種ワークショップ、公開授業、さらに環境整備事業としてアート・マネジメント人材育成事業である「TAP塾」、大学院壁画研究室が中心となり、市民と子ども

たちとの共同作業で壁画制作を行う「壁画プロジェクト」などが実施されています。

2. 児童画展

児童画展は、TAPが始まった1999年より行っている恒例企画です。TAP2005の児童画展は、平成17年11月の会期中に、取手市役所の藤代庁舎2階で行われ、取手市全18校の小学1年生890人の絵が優劣をつけることなく一挙に展示されました。「きょうね、がっこうでね、」というテーマで、新しい環境の中でいろいろな出合いを体験している1年生が、普段の学校で発見したもの、感じたことなどを描くものでした。

児童画展の会場内にはポストが設置されており、来場者にくじを引いてもらい、そのくじと同じ番号の絵を探して鑑賞した上で、描いた子ども宛てに、手紙を書いて投函してもらう「おともだちの絵におてがみをかこう!」という企画も実施されました。来場者からの手紙は、児童画展終了後、絵の返却の際に、一緒に本人に届けられました。手紙と絵を関連させることによって、今後子どもが絵を描いていく動機づけになり、地域におけるアートを通じたコミュニケーションも生まれています。

3. 学校へのアーティスト派遣

TAP2005の新しい試みとしては、希望する学校の授業にアーティストを派遣して、児童画制作のサポートを行うものです。

児童画展のサポートのために、平成17年9月から10月にかけて、小学校6校で7つのプログラムに、延べ15人のアーティストが派遣されました。吉田小学校では、ヤストモ飾案(杉尾泰崇・山田智子)の2人が、着ぐるみ姿でカラフル星の小学1年生に扮して、カラフル星の小学校の様子を楽しい

絵にして地球の1年生に教えました。子どもたちは学校生活のイメージを膨らませてから、地球のことを知らない2人に自分たちの学校生活を伝えようと夢中で絵を描き始めたところで、着ぐるみを脱いだ2人が子どもたちとコミュニケーションをとりながら、絵の指導が行われました。

ほかにも、「拾ってきた“きょう”を貼りつけて」や「おともだちと絵の部品を交換しよう!」などのテーマで、普段とは一味違った制作活動が行われました。

4. 文化芸術による創造のまち支援事業の活用

授業へのアーティスト派遣に当たっては、文化庁の文化芸術による創造のまち支援事業が活用されています。

この支援措置は、文化芸術によるまちづくりを推進する観点から、文化庁、都道府県、市町村などとの共催で、それぞれの地域において、①地域(まち)づくりなど地域の文化活動の活性化を図るための地域文化リーダー(指導者)の育成、②地域合唱団、劇団、吹奏楽団などの「地域の顔」となる文化芸術団体の育成、③地域文化の必要性、住民の役割、地域の特色などをテーマとするシンポジウム・フォーラムの開催による発信・交流を通じた文化芸術活動の活性化を図ることによって、我が国の文化水準の向上を目指すもので、中・長期的な視野で地域文化振興の基盤を整備する事業が支援の対象となります。

取手市では、平成15年度から当該支援事業を活用しており、人材育成事業とフォーラムの開催などの情報発信・交流活動を行ってきています。

5. TAP塾

取手市における人材育成事業としては、平成16年度より「TAP塾」と呼ばれる取手市内外のまちづくりや芸術に携わりたいと考えている人々やアートマネージャーを目指す人々を対象に、専門家による講義のほか、TAPが蓄積してきた市民運営によるアートプロジェクトの理念や実践方法を共有する場が開設されています。塾生はTAPのニューフェイスとして、平成16年7月に開催されたTAPフォーラムや同年11月に行われたTAP2004などの企画運営に携わりました。



吉田小学校でのアーティストによる派遣授業。ヤストモ飾案(杉尾泰崇・山田智子)の2人がカラフル星の小学1年生に扮して。

平成17年度には、人材育成事業では、アーティストと市民の共同による芸術活動実践プログラムとして「オープンスタジオ」の活動支援や平成16年度から実施されている「TAP塾」に加えて、隣接の守谷市において実施されている「アーカスプロジェクト」と呼ばれるアーティスト・イン・レジデンスの活動の場を利用して、連続セミナーが開催されました。また、本年3月には、アートが地域(地域がアート)と関わるシステムを長期的に維持する方法、アートと地域の両方を育てる方向性について考える座談会が行われました。

TAPでは、昨年7月に、第1回のフォーラムが「ひと・まち・アートの交差点」とは?」をテーマに開催され、さらに、本年3月にはカフェ「TAPチャンネル」と題した第2回のフォーラムが開催されました。そこでは、TAP2005を振り返り、「はらっぱ」のある活動拠点を取手駅近くに設けたことにより、TAPの活動が外から見える形で参加しやすくなったことや白山商店街で行われた「かえっこバザール」と呼ばれるイベントに3時間程度で700人の人出が出るなど、地域の活性化にも役立つことなどが報告されました。

6. 終わりに

取手市以外にも、東京都豊島区や神奈川県横浜市などで、文化芸術による創造のまち支援事業を活用して、地域がアートを育て、アートが地域を活性化する活動が行われています。紙幅の関係で詳述しませんが、ご関心のある方は、私が「地方財務」に連載した「地域再生の現場から」をご覧ください(おかもと しんいち)

※ <http://www.wagamachigenki.jp/saisei/02.htm> に「地方財務」の記事が転載されています。

芸術教育が子どもたちにもたらすもの

元・横浜美術館学芸員 深田 独

1. 「美しい」国土はいかに守られるのか

いま、私の住んでいる町で、あるマンションの建設計画をめぐる、景観論争が巻き起こっている。そのような問題は、全国各地で起きていると聞く。

ところで、2005年6月1日に施行された景観法という法律をご存知だろうか。その基本理念には、「良好な景観は、美しく風格ある国土の形成と潤いのある豊かな生活環境の創造に不可欠なもの」であるので、「国民共通の資産」として守っていくべきであると謳われている。

さてさて、法律にこうも形容詞が並ぶと、ふとわれに返って考えこんでしまう。良好な景観とは、美しく風格ある国土とは、潤いのある豊かな生活環境とは、なんだろうと。文化芸術基本法(2001年12月7日施行)の条文に、芸術とは何かということに関して、芸術の分野についての具体的な例示がなされたときにも驚いたが、景観法が守ろうとしている美しい日本の国土の実体とはいかなるものなのだろうか。

都市の景観について考えるとき、私の脳裏には、いつも一つの映像が浮かぶ。それは、オレンジ色の瓦屋根が広がるフィレンツェの町の俯瞰写真である。歴史ある町並みや自然の景観を守るためには、そこに住む人々に一定程度共通した美意識がなければならない。同時に、人々が自らを歴史的な存在として認識していなければならない。ここでいう歴史的な存在の認識というのは、過去と未来の中間点に自分が生きているという自覚のことだ。

半世紀後、私はこの世にいないだろうが、そのときには、いまの子どもたちが日本社会のリーダーになっていることだろう。彼らが成長していく過程で、いかなる美意識を共有し得ているか。それによって、美しい国土の姿が決まってくる。そ

してその責任の一端は、いまの大人たちにある。

2. 芸術作品との出会いによって育まれるもの

自らの美意識を形成する過程で、子どもたちにもっとも大きな影響を与えるのは、家庭環境や社会環境だろう。が、子どもたちが学校で過ごす時間の長さを考えるとき、学校教育の現場で、子どもたちの美意識形成に寄与する機会を設けることは、きわめて重要であるように思う。学校で芸術作品との出会いの場と時間を子どもたちに提供することは、そうした意味で意義深い。

芸術作品の鑑賞を通じて子どもたちがまず知るだろうことは、作品の解釈には一つだけの正しい解答というものは存在しないということ。つまり、解釈は自己の責任においてなされるものであって、先生や親が言っていることだけが正しいということもなければ、ほかの子どもたちと解釈が異なってもいいこうにかまわない、ということを知ることが、子どもたちにとっては、貴重な経験になるに違いないと考える。

同時に、解釈は言語で行うので、自分の感じたことを一貫性のある言葉で語らないと、他人には理解してもらえないという経験もすることになるだろう。そのことは、作品を語り合うためにはコミュニケーション力が必要であることを教えてくれる。

また、鑑賞を通じて、芸術作品はまるで自分を映し出す鏡のようなもので、自身の成長度合いに合わせてしか作品は見えてこない、ということも知るに違いない。作品にまつわる知識や情報は学習によって習得することができるが、作品を解釈するときに必要なイマジネーション力は、多くのすぐれた作品との出会いなどの経験がなければ、なかなか育まれないものだ。

さらに、もし何百年も前に、私たちが住んでい

るのとは異なる文化圏でつくられた作品に感動することがあれば、時代も、言語も、人種も、宗教も異なる制作者と自分の間にあるのは、ともに人間であるという共通項だけだと気づくかもしれない。そして、時空を超えて人間であれば感じる事ができる美が、そこにあることを不思議に思い、一方で、その人間同士が殺し合う現実があることをいかに考えるべきか思い悩むかもしれない。

芸術作品の鑑賞では、いつとき魂を作品世界に浮遊させながらも、いずれは実体のある日常生活世界に魂を呼びもどすことが必要である。感動体験は作品世界で起こるが、解釈は日常生活世界で行われるからだ。一方、現代に生きる私たちは、バーチャルな仮想現実世界と手で触れることのできるリアルな世界との境界が融解しつつあるという人類の歴史はじまって以来の事態に直面している。もしかしたら、芸術鑑賞の経験から、魂を仮想現実世界と日常生活世界の間を行き来させる技を体得することができるようになる子どももいるかもしれない。

3. 美術館が果たすべき役割

ところで、学校で美術作品の鑑賞教育を行うのは、なかなか困難なことだろうと思う。私は、作品との出会いの場として、ぜひ地域の美術館を活用していただきたいと願っている。美術館側から考えても、とりわけ自治体の財政難で苦境に立つ公立美術館にとって、学校とより連携を強めていくことは、今後ますます重要になってくるものと思う。

私が勤務していた横浜美術館のもっとも独創的な事業に、「子どものアトリエ」事業がある。幼稚園・小学校・養護学校と連携した学校のためのプログラムや、個人を対象としたプログラムを設けて、造形活動の指導や鑑賞教育をおこなっている。そこで指導をする担当者は、美術史を専攻した学芸員ではなく、実技を学んだ指導員たちである。

美術館が鑑賞教育の場としてだけでなく、造形教育の場としても機能していくことは、いまや時代の要請なのではないかと思う。その意味で、横浜美術館子どものアトリエは、今後の公立美術館のあり方に一つの方向性を示唆していると確信している。



鑑賞プログラムの指導をする横浜美術館・子どものアトリエの三ッ山一志指導員

4. 芸術教育の可能性

芸術にいたる道には、創作と鑑賞の二つがある。そのことを思えば、造形教育が鑑賞教育と表裏一体となって芸術教育があることは言うまでもない。

造形教育では、子どもたちが手でものをつくることの難しさを実感すること、そしてできれば楽しさを体験することが大事だと考えている。造形活動の体験から、つくられたものを大切に作る心が育まれるかもしれないし、あるいは、同一の課題で同じ材料を使っても、一人一人つくるものが異なっていることを学ぶかもしれない。そうした体験をする機会を提供することに、造形教育のかけがえのない価値があると思う。私は、音楽作品や文学作品などの鑑賞や創作も含めた芸術教育が、子どもたちの美意識形成に大きな役割を果たすものと信じている。

民主主義国家では有権者の意識に見合った政治・行政がなされる、とよく言われる。そうした国では、どのような「美しい」国土が守られていくのかも、国民の美意識に見合ったものであるに違いない、と私は思う。

(ふかだ ひとり)

図工だからできることを求めて

— 造形活動を通して学習経験を再統合する —

東京都中央区立明正小学校 竹内とも子

1. 造形教育の役割って何？

図画工作科の専科教諭である私自身は小学生のころ、実は、図工は不得意教科だった。でも、好き。好きだった理由をあえて探せば、授業なのにどこかユルユルとした心地よさがあったからかもしれない。材料やテーマらしきものは決まっているけれど、そのほかはかなり自由にかいたり、つくったりできる。しかも、水入れの水を取り替えるとか、材料を取りにいくとか大義名分があるから席にじっとしてなくてもいい。ついでに、友達がつくっているのを覗いて、話しかけて。

恩師に怒られそうだが、図工の先生は図工の時間と同じくらい、ユルユルとした空気の人だった。私たちに「授業だから〇〇しなければならない」と感じさせなかった。

しかし、立場が変わって指導する側になると、「限られた図工の時間で、身につけさせる力は何か？」「学校教育での図工の存在意義はどこにあるのか？」などと考えてしまう。

図工で身につけさせたい力は、材料などの特徴を生かして、形や色で自分の思いを表現したり、自分が発想したものをつくり上げたりする総合的な力だと考えている。技能はもちろん、造形的なものの方・考え方も、やり抜く力なども含まれる。言い換えれば、形や色、ものの質感などに関わって、自分を取り巻く世界を再発見し、新たな意味をもたせながら再統合する力だと考えている。

そして、図画工作という教科の大きな意義は、造形活動を通して、子ども自身がさまざまな学習経験や生活経験を、主体的に関連づけながら自分のものにしていく過程にあると思う。

2. 造形活動を通して学習経験を自分のものに

表したいことを発想するには、具体的なイメー



「ふしぎなタネをまいたら」最初はみな同じ画用紙が、すべて異なる形と色の宇宙ようになっていく。



「雪が降っている町」1年生の生活科で朝顔を育てた経験からイメージを広げ、表したいことを発想した。オイルパステルや絵の具を試し、工夫して使いながら、全身の感覚を働かせて表した。

ジを描くための経験が重要である。

2年生の春の題材『ふしぎなタネをまいたら』では、1年生の生活科で朝顔を育てた経験からイメージを広げ、発想を促した。「朝顔のタネをまいたら、2羽のウサギの形みたいな葉が出て、次にハートみたいな葉っぱが出て、グルグルとつるがのびて、渦巻きをつぼみが開いたら、ちゃんと朝顔の花が咲いて、また元のタネとそっくりなタネができる」という、当たり前のような不思議さ。その経験を生かして「こんな花が咲いたり、実がなったりすると楽しいな」と想像し、それにピッタリのタネを絵に表す。そして、タネを切り取り、白い画用紙の土にまいて(貼って)、手や全身の感覚を十分に働かせながら、オイルパステルや絵の具で表していく。最初はみな同じ白い画用紙が、すべて異なる形と色の宇宙ようになっていく。子どもたちの経験したことや想像したことは、造形活動を通して形や色に変換されていく。そして、

目と心と手で確かめられ、自分の中で再統合されるのである。

6年生の題材『マイ・ボックス』では、ものの中に入れるという用途を考え、楽しい発想をして、一枚の板材から箱をつくった。算数での学習では、立方体や直方体の展開図を表したり、工作用紙で実際につくったりしている。角柱や円柱などの特徴をとらえる学習も行っている。この算数での学習経験は、本題材での発想や構想を支える考え方の基礎ともなる。

しかし、実際に自分のつくりたい箱をつくりたいとすると計算通りにはいかない。板は微妙に反っていたり、のこぎりで切ったときの誤差も出たりする。子どもは「ちゃんと定規で測ったのに」と、がっかりしている。私は、「計算通りにはいかないのが人生ってのもんでしょ。図工で人生の勉強もできるなんていいね」などと、救いを求める子どもを煙に巻きつつ、うまくいかなかった原因を見つける発問などをしてみる。たいていの子どもは自分で「そっか」と答えを見つけ、なんとかしようと考えている。

つくりかけの箱を回しながら、いろいろな方向から見ている。くぎを抜いて、もう一度組み立てている。一部分だけ新しいものと替えている。そして、しばらくすると、予定より箱はひと回り小さくなっていたり、隙間に飾りがついて、はじめの計画より楽しくなったりしている。子どもたちは、つくりながら、課題を自然に解決してしまうのである。



「大好きなイチゴショート」
「夢はパティシエになること」算数の立体学習がつくりたい「MY BOX」の発想・構想に生きていく。

3. 造形活動を通して身近な世界を再発見

4年生の鑑賞の題材『分類学入門』の授業では、

図工室あるものを形や色、材質、用途などの視点を設定して分類するゲームを行った。例えば、グループごとに、赤・黄・青・緑・白・黒の仲間でも分類すると、同じ赤の仲間でも、絵の具やカラーペンの赤はもちろん、辞書や色画用紙の切れ端、リボンテープ、バケツ、手ぬぐい、マグネットなど、さまざまなものが含まれた。

次に、グループごとに分類する視点を隠して集め、ほかのグループの人は、どんな視点で集めたかを当てた。透明なもの、光るもの、丸いもの、ふわふわしたもの、自然のもの、入れ物であるなど、さまざまな視点で集められた。本題材は、図工の学習なので、造形的な視点で分類したが、導入時には、社会科のごみ処理の学習での、ごみの分別からイメージさせた。また、生物の種の分類や、図書室の本、百貨店やスーパーの売り場など、身の回りにあるものは、実はさまざまに分類されていることや、同じものも視点によっては異なる属し方になることなどの気づきにつなげた。

この学習経験は、次の集めた材料をもとに、つくりたいものをつくる内容の題材『材料の変身』で生きていった。子どもたちが、形や色を何かに見立てたり、例えば透明な材料の特徴を生かして中が見える楽しさからつくりたいものを思いついたりするなど、発想を促す学習経験となった。

4. 新たなものを生み出す力を育む造形教育

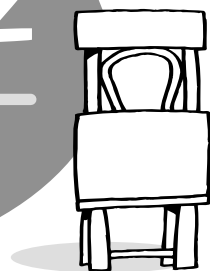
造形教育は、学校教育ばかりでなく、よりよく生きる上でもなくてはならないものである。子どもたちは、造形活動を通して材料に働きかけ、その変化を確かめ、また試しながら、自分の世界をつくり出す。経験を再統合し、新しいものの見方、考え方を自ら育んでいく。こうした活動の時間と空間が保障されている図画工作という教科は、造形芸術的なものに限らず、科学的な分野においても重要な「素材」と「知恵」と「技」で、新たなものを生み出す基礎的な力を育むのではないかと考えている。

小学生時代に出会った、あの図工の先生のユルユルとした心地よい雰囲気は、実はそうした環境づくりにとても大事なことだったのかもしれない。(たけうち ともこ)

子どもの椅子

FROM

熊本県熊本市立花陵中学校
杉本 一臣



木彫の学習をはじめて7時間目のことだった。いつものように生徒たちの制作を見て回っていると、「先生、木目が見えてきました。彫刻刀がスーと入っていきます。これって木の心がわかってきたのですかね」
浮き彫りをしていた生徒がいかに一人前の木彫り職人のよ

うにつぶやいた。すると、それを聞いた隣の生徒が「そうそう（彫刻刀で彫っていると）、何だか木が気持ちよさそうです」
材料は18cm×26cmのかつらの無垢材。何の変哲もない素材だが木には人の心を引きつける不思議な力がある。日頃はしゃべり出す子どもたちが1枚の板と

無心に格闘をする。毎年、1年生はこの学習を通して、すてきな制作ドラマをつくり上げる。
最初の彫りはじめでは木材の表面がかたく、彫刻刀がうまく木に入り込まず悪戦苦闘する。そして、なかなか進まない彫りの繰り返しの途中で、切り出し刀や丸刀などの技法を体得していく。もちろん、重なり彫りの表現はてこずるので、教師へのヘルプも大盛況になり、大忙しである。一人一人の悩みや質問に応えながら会話も弾む。友達がすごいテクニックを身につけると感嘆の声があがり、そのテクニックを盗もうとそのまわりは人ばかりで、彼はヒーローになる。中には、その極めた技法

を友達に伝授する生徒も出てくる。やがて、要領がわかってきた後半は、仕上げに向かって集中力と忍耐力が要求される。「もうダメです。手がしびれてきました」
「ああ、やってしまった。まちがって削っちゃいました」
彫刻刀で彫る音だけが響く中、生徒の絞り出す声に、私はひたすら励ましのフォローに努める。制作の間は山あり谷あり、まるで人生の縮図みたいに生徒たちの心が躍り、はじける。
そして終盤、荒削りの部分をならしサンドペーパーで磨き上げる。一人の生徒が満面の笑みで作品を持って来て、「先生、この手触り最高でしょ

う。触ってみて下さい」
その声に押されて目を閉じて感触を味わう(なるほど納得)。
生徒たちは制作を通して、いつの間にか木と自分の思いが一体化していくことに快さを感じてくる。木材という自然素材のよさが人の心まで豊かにしてくれる。この木彫は3学期のほとんどを費やして制作する(12時間程度)長丁場の学習だが、それに見合うだけの価値を見い出せる題材だと思っている。木というぬくもりのある素材や彫刻刀というシンプルな道具、そして、手作業で自分の思い描く形に少しずつ近づく表現過程が魅力的である。最後に完成後の生徒の感想を一つ紹介する。



平刀で輪郭の最後の仕上げ

「最初は浮き彫りのための彫刻刀の使い方が思うようにできず、イメージしたバラの花に仕上がるか不安でした。でも、彫り進むうちに、サクサクと調子よい彫り音がしてきて楽しくなりました。特に、切り出し刀による細やかな彫りの表現をたくさん学びました。自分にとっては会心の力作で大満足です」
(すぎもと かずおみ)

図工室

美術室

今から15年ほど前に造形遊びとは何かを学んでいた。
3歳と1歳になる姉弟が、大きな段ボール箱にどうかかわるか観察した。まず姉が中に入って、お風呂に見立て、二人でごっこ遊びを始めた。弟が箱を揺すったことをきっかけに、電車ごっこになった。さらに、油性ペンで箱の内側に家族の絵を描き始めた。空いている所には、うさぎ、鳥、花など、自分たちが知っているものを描き加えていった。私は、子どもの要求を受け止めて窓やドアをカッターナイフでつったり、破れた箇所を粘着テープで補強したりする支援をした。その箱は二人にとって大切な遊び道具になり、日常的に繰り返し箱の中に入っ

造形の楽しさを子どもたちに

中浦 雅芳(大分県大分市立日岡小学校)

て遊ぶ姿が見られた。
この一連の姿が、子ども本来の姿だと感じた。「子どもにとって魅力ある題材との出会い→その子の思いが膨らむ他からの働きかけ(言葉、行為等)→困ったときの適切な支援や賞賛→さらなる工夫への導き」という流れに沿って、つくり生み出す造形の楽しさを味わう。
今、5年生で木版画に取り組んでいる。彫刻刀で苦労して彫り上げた木版を試し刷りする。紙をはがすと、自分の彫った形が浮き上がる。その結果を見て、

驚き歓声をあげる子もいれば、もっとここを彫ったほうがいいかなと悩む子もいる。それぞれが木版に挑み、彫る楽しさ、刷る喜びを味わっている。自分の思いを、手を使って表現する姿がとても素敵だ。現代は便利になり、何でも簡単に手に入る。コンピュータなどで仮想世界に入り、思いのまま楽しむことができる。このような時代だからこそ、素朴な材料に挑み、自分の思いを本物の色と形で表現する造形の楽しさを子どもたちに伝えたいと強く思う。
(なかうら まさよし)

かかわりから、感じ、考え、表現する授業づくり

内田 十詩哉
(埼玉県久喜市立久喜中学校)

美術の授業で大切にしたいこと。私は、子どもたちがいろいろなもの(自分も含めた)や現象とかかわりながら、感じ、考え、表現することそのものであると考えている。子どもたちは、生活世界や他者(友達、友達の表現、自分が表現したものなど)とのかかわりで、五感や過去の経験、思い出を総動員して、感じ、考えていく。そこでの思いを表現することを通して、自分の色や形を獲得していくのではないだろうか。そこでの表現は、子どもにとって思い通りのものに

なることは少ないが、自分の表現した色や形とのかかわりから、さらなる新しい表現を生み出させたい。教員は子ども理解に努力しながら、共に学ぶ姿勢を大切にして、支援を進めていく。このような表現プロセスを大切にしたい授業を進めるためには、かかわりから「感じ→考え→表現する→感じ→考え→…」のサイクルで制作が進んでいく題材の工夫、子どもたちの表現活動を大切にしたい支援の工夫が必要である。
また、美術の表現は、学校全



中学2年「私の世界、私の宇宙を表現しよう」自分自身との内や外からのかかわりを深められるよう、支援の工夫をする。
体をプロデュースしていく力をもっていると考える。美術の授業を基本として、学校環境づくり、行事での取り組みなどの機会に、積極的に表現の場を設けてかかわることで、学校を変えていきたい。美術は、子どもを変え、学校を変えていくものである。
(うちだ としや)

環境と繋がる造形遊び(6年生)

横浜国立大学教育学部附属横浜小学校 石賀 直之

1. はじめに

「やっぱり造形遊び！」

早いもので、もう新年度・新学期が始まったが、昨年度の図画工作の授業で、何が印象に残ったかなと思ひ起こしてみた。表現ツールの可能性を求めてPCに着手してみたり、風絵の具なるものを試したり、木片の可能性を追求してみたり…。開隆堂の教科書題材を含め、自分なりにいろいろ考え、取り組んできた。その中で秋に実践した造形遊びが印象に残っている。そういえば一昨年も造形遊びが一番印象に残ったな、と思った。なぜだろう？ 自分自身、造形遊びを重点的に取り組んで研究しているというもある。しかし、それだけではない。

世の中と繋がる造形遊びの世界

ものをかいたり、つくったりしていると、自分と作品が対峙する感覚になることがある。これはこれで大切なことであるが、造形遊びはそれにとどまらない感覚になる。それはなんだろう？ 一言で言うと「世の中と繋がる感覚」である。たとえば、枝を地面に刺すとしよう。その枝は、周りの景色の中で意志を持って立っているように見える。その場の雰囲気が一変する。通りがかりの人が不思議そうに見る。光が当たって、一直線の影ができる。別の児童がその横にもう一本枝を刺す…。一本の枝が世の中と繋がって、新しい意味をつくっていく。造形遊びはそんな活動である。周りを巻き込むから印象も深くなる。当然の結果である。

2. 活動の流れ

「最初の一言、何を言おうか」

自然の中で行う造形遊びの場合、アンディ・ゴールドワージーの作品集を鑑賞するなどの事例も



多いが、そのような活動を示唆するようなことはしなかった。ただ、自然の中に入ってこんなことにこだわった。

「話す前に自然の真ん中でぐるっと味わうようにゆっくり辺りを見回す」

すると、子どもたちも何かを探すように一緒になって周りを見る。「何もないじゃない」と言いたげな子どもの表情。しかし、無意識にあらゆる情報が目から耳から鼻から皮膚から入ってくることに子ども自身気づいていない。それでいいのである。投げかけも単純。要約すると以下の一言である。

自分の気に入った場所を探して、自然を使って景色を変えてみよう。

何気ないようだが、思いつきで子どもに話しているわけではない。ポイントは景色を変えるという言葉である。何かをつくるのではなく、景色を変えるのである。

題材のよさとねらい

自然の美しさや環境、場所と出会い、そこにある自然の材料のよさを見つけたり、生かしたりしながら、思いついた活動を楽しんでいく。

題材のねらいと目標

【関】：自然環境のいろいろな特徴を感じ取り、自然材料を効果的に使いながら、自分が納得できるように表す。

【発】：自然材料を生かして、どのように風景を変えていくか思いつき、材料の組み合わせや表し方などの思いを巡らせる。

【創】：自然材料を効果的に使い、風景を変える工夫をする。

【鑑】：自分や友達の表現の違いやよさを味わう。

3. 子どもの活動

落ち葉を並べる子どもたち



猛然と落ち葉を集めている。何が彼らをそうさせているのだろうか。辺りを見回していると、風に吹かれて吹きだまりのような場所に、落ち葉の山ができていたらしい。彼らにとって、その景色は新たな意味をつくり出すにふさわしいものだった。



散歩をしていたお年寄りの方に興味深げに声をかけられたらしい。

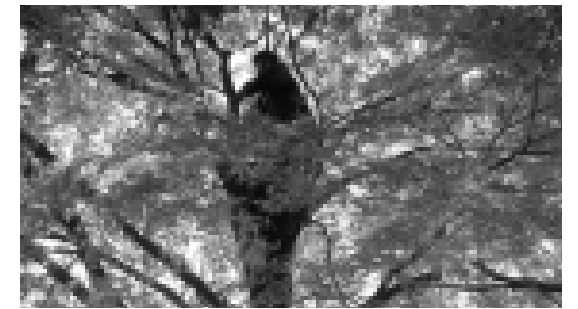
「なんだね、こりゃ。鳥かな？」

あちこちに鳥のように地図をつくることを思いつく。子どもたちの活動はさらに広がっていく。

落ち葉のないところを入念に掃いて落ち葉の山をより強調していく。



「高いところから見てみようぜ！」という話になり木に登って見下ろしてみた。



すると、

「こらっ！ どこ登ってるんだ！」

と、叱られたらしい…。

4. 終わりに

周りの人、景色、友達、落ち葉、風、光…、あらゆる状況すべてと絡み合う糸のように関わり繋がりがりながら、活動が広がっていく。ダイナミックさとはスケールのことではなく、あらゆる要素を内包していることだと思う。事実、小さな小さな活動にも、あらゆる要素を取り込んだ造形活動がいくつも見られた。

前号に掲載されていた美育文化編集長・穴澤氏の記事を興味深く読んだ。

「そうだよな、造形遊びは日本が世界に誇れる造形活動かもな」私も穴澤氏と同意見である。

※3月までの前任校・横浜市立万騎が原小学校での実践 (いしが なおゆき)

「発想力」を育てるデザイン学習

福岡県那珂川町立那珂川北中学校 大森 義弘

1. はじめに

表現活動においては、表現に至るまでに問題点を明らかにし、解決の手がかりに気づいたり、思いついたりしながら、多くのアイデアを出すことです。そして、想を広げ、模索しながら、問題点を解決していく力が重要となります。そこには、題材との出会いの感動に、自分の夢や願望を重ね合わせながら、主題を決めていく力や、課題を解決するためのアイデアが多角的で、かつ質の高いものが大量に出てくるような能力や態度が必要です。

デザイン学習においては、作品制作の目的や用途と、自分の願望や欲求を合理的な判断によって分析し、問題点を明確にした上で、色や形、質や量、位置に変化を与えながら画面を構成していく必要があります。そこで、構想段階の指導が重視されるデザイン学習で、発想を促すための有効な手立てとして「操作活動」を取り入れています。

2. 発想を促す「操作活動」

いろいろなアイデアが出てくる状態を見ると、普通の場合は、まず記憶あるいは直接目に触れる参考資料などをヒントにした自由連想によるものが多いです。そこでは偶然にアイデアが出てくるもので、行き詰まったとき、そこからさらに展開していくことは非常に難しくなります。このようなとき、生徒自らが見方や考え方を変えることができるような活動として「操作活動」を取り入れています。これによって、生徒自らが打開できる豊かな発想が生まれると考えました。

ここで言う「操作活動」とは、さまざまに表出した表現のもととなる「言葉」や「造形要素」を並べたり、組み合わせたり、重ね合わせたり、移動させたりする活動です。この活動を表現に至る

までの構想段階に適切に位置づけることにより、感じる心をイメージとして表現へと結びつけることができ、相互に伸ばし高められていくものと考えます。

(1) 具体物による操作活動

これは表現のもととなる「言葉」や「形」などをカード化し、それを画面上で動かしながら画面構成を考えていく「操作活動」です。

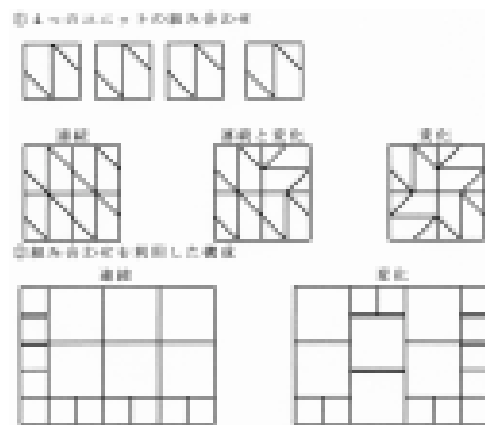
① カード(言葉・形)

・言葉による操作活動

主題を決めるとき、まず思いついた「言葉」をカードに書かせ、KJ法を使い、自分の主題へと高めていきます。

・形の「操作活動」

表現のもととなる「形」をカードに描き、そのカードを動かしながら画面構成を考えます。



カードを使った平面構成例

② トレーシングペーパー(形)

トレーシングペーパーを活用すると、描いた形を重ね合わせることができるため、形同士の響き合いが生まれます。

(2) パソコンによる操作活動(形・色)

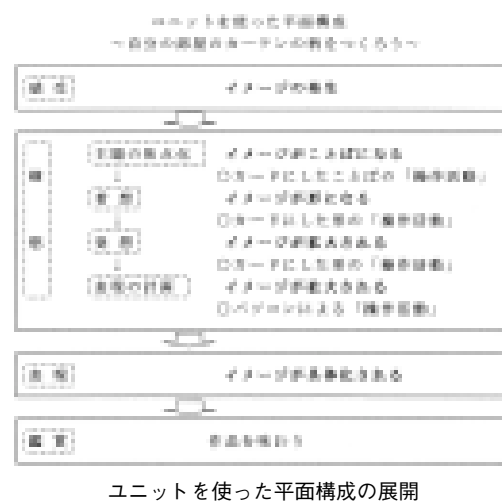
パソコンではスキャナーなどで取り込んだ表現のもととなる形を移動したり、拡大・縮小したり

します。その変化はかなり自由度があるとともに、スピーディーにさまざまな組み合わせを試すことができます。また、色を考えたときにも簡単に着色することができるのも利点です。

3. 「操作活動」の展開への位置づけ

ここでは2年生の題材『ユニットを使った平面構成』で説明します。構想段階は自分の主題に向け、出てきたさまざまなイメージをいろいろな角度から試行錯誤して表現への足がかりをつかみ、感じる心をイメージとして表現へと結びつける段階です。

そこで、この構想段階の各段階に、活動に合わせた「操作活動」を生徒に発想を促す手立てとして取り入れました。



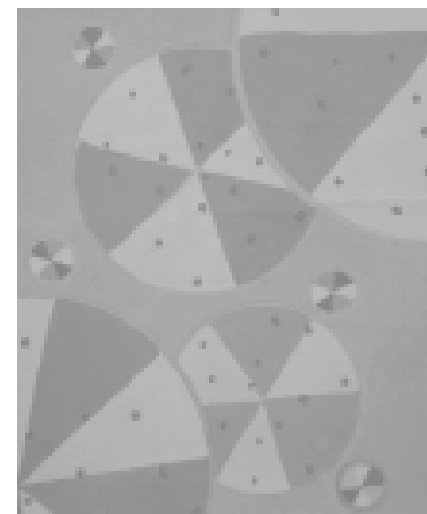
ユニットを使った平面構成の展開

4. おわりに

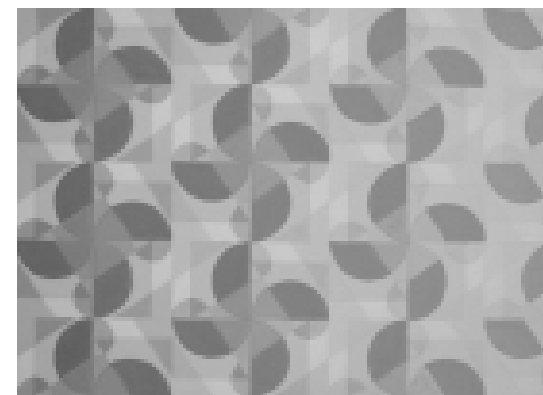
体験や表現への意欲が乏しい生徒にとって追体験の場としての「操作活動」は、生徒の豊かな発想を促す手助けになっていると考えます。また、この「操作活動」はデザイン学習のみならず、他の分野でもアイデアを練り、構想を練る段階において取り入れることができます。

今後も、生徒の美術を愛好する喜びを味わわせ、豊かな情操を養うことの一助になればと思い、さらに指導方法の工夫を行っていきたくと思っています。

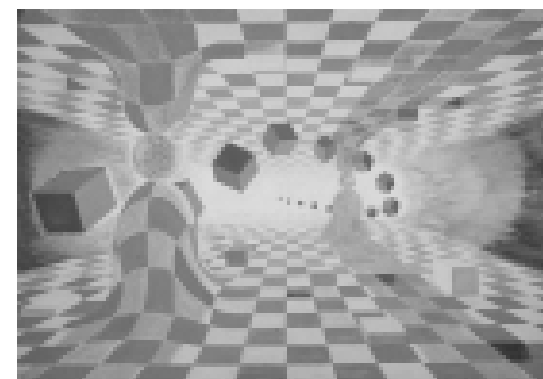
(おおもり よしひろ)



1年生「自然物からの平面構成」



2年生「ユニットを使った平面構成」



3年生「立体感のある平面構成」

「できたて泡ビールで乾杯！」

カボチャドキヤ国立美術館館長 トーナス・カボチャラダムス

ドイツ文学者の故・種村季弘先生は、確かに、亡くなられた…はずである。新聞に追悼記事も出たし、吾輩は湯河原まで墓参りに行ったのである。

吾輩は、確かに、生きています…はずである。朝ごはんを食べ、厠(かわや)に行き、今、原稿を書いているのである。

しかし、「生ける屍」という言葉もある。吾輩が敬愛してやまない騎士ドン・キホーテは言ったのである。

「サンチョよ、わしは死にながら生きるために、そしておまえは、食いながら死ぬために生まれてきたのじゃ」

生命が靈魂で、靈魂がエネルギーで、エネルギーが不滅なら…人は、見た目だけで、生きていますとか死んでいるとか言い切れないのであろうか？「ふう」

驚いて目が覚めたら、湯から上がられた種村先生が大きなオナラをされたのであった。

生前、湯河原の御邸に泊めていただいたことがあったなあ。先生の御邸は、全山黄金色に輝く密柑山のとっぺんだった。富士山から吹き下ろす強い西風の通奏低音に、種村先生のイビキ、寝言(ドイツ語と日本語)、唄(ドイツ語と日本語)、オナラ、歯ぎしりの大協奏曲で、吾輩はほとんど一睡もできなかったのである。

「さあて、湯上がりに、おいしい実在ビールを飲みに行こうか」

もうひとつ大きなオナラをされて、種村先生が言われたのである。やれやれ、またしても種村先生が実在のビールを飲んで、吾輩のは反映に過ぎないのか！実在ビールだか反映ビールだか知らないが、「できたて泡ビール」なら「ビヤダル横丁」に行けばいい。

国鉄門司駅の隣は、ビール工場である。

ビールの醸造貯蔵に、ステンレスのタンクが使われるようになって、会社は要らなくなった檜の

大樽を空き地に放っておいたのである。

20年ほど前、「自由青年芸術団」と称する野良猫の一団がやってきて、勝手に樽に住みついたのが「ビヤダル横丁」の起源である。

「ビヤダル横丁」は全部で24軒ある。半分はビール酒場になっていて、家主の会社がつくる「できたて泡ビール」を飲ませる。ほかに床屋がある。

ラーメン屋がある。簡易ホテルがある。狭いながらも、パチンコ屋から銭湯までであるのである。

「ビヤダル横丁」の猫たちは、酒場の主人でなく、ラーメン屋でなく、床屋でなく、われわれは詩人である、俳優である、音楽家であると言うのである。

近頃は、めったに芝居もないし、音楽も聞こえなくなった。野良のあいだは芸術家であったものが、人並みに食えるようになると、芸術なんかどうでもよくなるものらしい。

樽酒場の一軒に入って、七輪で焙ってくれる関門のサヨリを肴に「できたて泡ビール」を飲んだら、死んだはずの種村先生がしみじみとおっしゃるのである。

「ああ、うまい。生きていることは素晴らしい」
(つづく)



ビヤダル横丁

秋田県造形教育セミナー

秋田市立秋田西中学校 築地 洋

「つくり手のテーマ志向を大切にしよう！ただ漫然と、楽しいから、おもしろいからといった思いではなく、見る者の感動や感激を呼び起こすようなつくり手の心の叫びを大切にしよう！」

私たち、みちのく秋田の造形教育集団はこんな思いを胸に日々試行錯誤を重ねています。

秋田県造形教育研究会は、県内小・中学校の教師345名からなる団体です。本団体の主な活動としては、隔年で行われる造形教育セミナー並びに県造形教育研究大会、そして毎年開催している県児童生徒美術展覧会があります。本号では、県造形教育セミナーを紹介します。

今回で41回目を数える秋田県造形教育セミナーは、平成17年8月15日に、秋田市立高清水小学校を会場に開催されました。当日は酷暑の中にもかかわらず、約100名ほどの先生方が元気に参会されました。「造形美siness(ビジネス)」をテーマに、児童生徒の心を揺さぶり、テーマの具現化にこだわりをもって取り組ませる支援のあり方について、その考え方や指導法を見つめるといった内容で展開しました。

冒頭の会長あいさつでは、佐藤俊彦会長から、現在の美術教育のおかれている危機的状況、そしてそれを打開すべく、造形教育に携わる私たち一人一人の意識改革、行動改革を行うときであるという熱い提言がなされました。

講演会には千葉大学教授の藤澤英昭先生をお迎えしました。『元気の出る造形教育の展開』と題した講演では、先生の明るい人柄がにじみ出る、あたたかいお話が盛りだくさんで、参加者は暑さも忘れ、講演に聴き入っていました。これからの造形教育を支える私たちにとっての指標となる、すばらしい講演でした。視力に障害のある児童がお母さんの暖かさや重さ、ぎゅーっと抱きしめられた心地よさを感覚的にとらえ、表現した作品の話などは、まさに「ものづくり」の原点にふれる大切なお話であったと感じます。藤澤先生には、来年度開催の東北大会におきましても記念講演をお

願っております。次回の講演も楽しく心に響くものであることをご期待し、楽しみにしたいと思います。

午後からの実技研修では、三つのコース別研修となり、参加者はそれぞれに分かれ、研修を深めました。講師の先生方の熱心なご指導に子どものように目を輝かせて熱心に参加する先生方の姿が多くみられ、とても実り多い研修となりました。今後の指導のヒントとなる、たくさんのおみやげを持ち帰ることができました。

我々の「みずみずしさ」が子どもたちの感性をくすぐり、心を開き、食欲を引き出します。そのために我々教職に携わる造形人は、意識して感性のアンテナを高く張っておくことが肝要です。そんなアンテナに同調する旬の素材のような研修の場、お互いが磨き合える機会をこれからもたくさんもてたらいいなと思っています。

(つきじ よう)



秋田県造形教育セミナーでの実技研修風景